

モンテーニュ，見上げる目，見下ろす目 (4)

— 『エッセー』における「見る」行為と斥けられた「見上げる目」の対照性 —

奥村 真理子

【キーワード】 フランス文学・16世紀・モンテーニュ・『エッセー』

作品には，全体にわたって見出される支配的な要素と，例外的な要素がある。何れもが，その作品の特性を表わす要素として注目に値する。『エッセー』においては，「見る」行為と，「見る」行為の戒めがそれらである。この場合，モンテーニュが一方では「見る」ことを重視して積極的に行い，他者にもそれを期待し，勧めているのに対し，他方では特定の事柄に限り「見る」ことを斥けているだけに，その対照性が双方を際立たせる。本稿ではこの対照性について考察したい。

1. 「見る」こと，その対象。

モンテーニュは『子供の教育について』の中で，「彼の教育も勉強も学習も，ただこの判断力を作ることが目的なのです (Son institution son travail & estude ne vise qu'a le [=son jugement] former)」(I, 26, M. p.197; V. p.152)¹ と，判断力の養成を最重要課題として掲げる。そのために勧める方法においてきわめて重要な役割を担うのが，見ることである。

教材は，「われわれの目に入るものすべて」である。日常的に見かける愚かな行為や雑談でも構わない。すべてが判断の新しい材料である。

[A] Or a cet apprentissage **tout ce qui se presente a nos yeux** sert de liure suffisant. La malice d'un page, la sottise d'un valet, un propos de table ce sont autant de nouvelles matieres. (M. p.198; V. *ibid.*)

対象となる人間の身分も問わない。「至る所に目を向けること」が大切である。むしろ下座で機知の利いた会話が交わされることを，モンテーニュ自身が「見た」ことによって知っているからだ。

[A] On l'advisera [C : advertira] estant en compagnie d'**avoir les yeux par tout**. /.../ I'ay veu ce pendant qu'on s'entrenoit au haut bout d'une table de la beauté d'une tapisserie, ou du goust de la maluoisie, se perdre beaucoup de beaux traitz a l'autre bout. (M. pp.202-203; V. p.155.)

つまり、先入観や偏見で見る対象を限定しないのである。だから、人間であれ、物であれ、「何でも探求する正しい好奇心」を持たせ、「周囲の変わったものは何でも見させる」ように勧める。

[A] Qu'on luy mette en fantasie **vne honeste curiosité de s'enquerir de toutes choses**. Tout ce qu'il y aura de singulier autour de luy, il le **verra** : vn bastiment, vne fontaine, vn homme, le lieu d'une bataille ancienne, le passage de Cæsar ou de Charlemagne. (M. p.203; V. p.156)

「われわれの鼻先しか見ないような狭い視野 (la veüe racourcie a la longueur de nostre nez)」(M. p.206; V. p.157)ではなく、世界を「教科書」とし、旅行や書物によって多くの実例を知ること、国境のみならず時代をも越えた広い視野を得ることもまた欠かせない。そのような実例に、哲学の理論も「人間の行為を計る試金石」として加えられる。

[A] Ce grand monde que les vns multiplient encore comme especes soubz vn genre, c'est **le miroüer ou il nous faut regarder pour nous connoistre de bon biaiz**. Somme ie veux que ce soit le liure de mon escolier. **Tant d'humeurs**, de sectes, de iugemens, d'opinions de loix & de coustumes nous apprennent a iuger sainement des nostres, & apprenent nostre iugement a reconnoistre son imperfection & sa naturelle foiblesse : qui n'est pas vn legier apprentissage. **Tant de remuementz d'estat & changementz de fortune** [C] publique [A], nous instruisent a ne faire pas *grande recepte* [C : grand miracle] de la nostre. **Tant de noms, tant de victoires & conquestes** enseuelies soubz l'obliance, rendent ridicule l'esperance d'eterniser nostre nom par la prise de dix Argoletz, & d'un poullailler, qui n'est conneu que de sa cheute. L'orgueil & la fierté de **tant de pompes estrangieres**, la magesté si enflée de **tant de cours & de grandeurs** nous fermit & assure **la veüe** a soustenir l'esclat des nostres sans siller **les yeux**. **Tant de milliasses d'hommes** enterrez auant nous, nous encoragent a ne craindre d'aller trouuer si bonne compagnie en l'autre monde : ainsi du reste. [C] Nostre vie, disoit Pythagoras, retire à la grande et populeuse assemblée des jeux Olympiques. /.../ Il en est, et qui ne sont pas les pires, lesquels ne cherchent autre fruit que de **regarder** comment et pourquoy chaque chose se fait, et estre **spectateurs** de la vie des autres hommes, pour en juger et regler la leur. [A] Aux exemples se pourront proprement assortir tous les plus profitables discours de la philosophie, a laquelle se doiuent toucher les actions humaines, comme a leur reigle. (M. pp.208-209; V. pp.157-158)

世界を「鏡」とし、そこに「自分自身を映して見る」ことにより、自分自身を正しく認識し、正しく判断できるようになる、という言い方においても、数多くの外国の盛儀を知ること「視力が鍛錬され」、自国の「絢爛さを、目を細めずに見られるようになる」という言い方においても、判

断力の養成と視覚的表現が密接に結びつき一体となっている。人生をオリュンピア競技に集まった群衆に喩え、その中に、専ら物事と他人の生活を「見る」ことで、自分の生活を判断し規正する人々がいることを語る、テキストCの加筆はこれを増強している。

ここでモンテーニュが勧めている事柄は、まさに『エッセー』の著者が自ら行っていることである。身近な日常の場面から、古今東西の世界に至るまで、直接・間接を問わず、見聞であれ読書であれ、出会ったあらゆる人物や事物や出来事をモンテーニュは見る。最後の引用における「これほど多くの (tant de)」という言葉の繰り返しは、『エッセー』に記述された事例の多さに照応する。「tant de」に導かれた様々な事柄は、『エッセー』の題材の多様性の縮図と言える。彼が対象を認識し、判断を試みることを述べる時、目や視覚を表す語彙を用いていることは、本稿(1)で考察したとおりである。また、『エッセー』の中で事例を挙げる時、実際に見た事物ばかりでなく書物で読んだ事柄まで、しばしば「私は見た(ことがある) (j'ay vu)」, 「私は目にする (je vois)」等の表現を介して導入している。(無論、「lire」(読む)の代わりに«voir»(見る)を用いることは一般に例外的なことではない。しかし、そのような慣用的な比喩から、モンテーニュは認識と思考を形成、展開していくのである。) そのようにして、彼が出会うあらゆるものが、『エッセー』という自画像を描くために自分を映して見る鏡«miroüer」となり、彼の判断の試しの材料«matiere」となる。彼が種々の哲学の理論を「人間の行為を計る試金石」としていたことは、言うまでもない。そうした「判断の試し」を記す時、彼はしばしば、「われわれは見る (nous voyons)」, 「御覧なさい (voyez)」と実例を示す。これは、読者を説得するためというよりも、読者にも見ること、判断力を働かせる機会を設けるためのものである。『エッセー』に述べられたモンテーニュの判断は、彼自身が繰り返し言うように、読者に教えたり押し付けたりするものではなく、彼の「視力 (la mesure & force [C *supp.*] de ma veüe)」つまり判断力を示すものだからである (II, 10, M. p.103; V. p.410)。

2. 「神罰として人間に与えられた知識欲」、天文学。

しかし、モンテーニュが子供に教えることを勧める哲学は、「彼の品性と判断を正し、自己を知り、立派に死に、立派に生きることを教える思想」である (I, 26, M. p.210; V. p.159)。「幾何学や音楽 [C:自然学] や修辞学や論理学」は、その後でよいと言う (M. p.211; V. p.160)。なかでも天文学は、真っ先に、しかも他よりも強く除外される。

[A] C'est vne grande simplessse d'apprendre a nos enfans [B]/.../ la science des astres et [A] le mouuement de la huitiesme sphere, auant que les leurs propres. (M. p.210; V. p.159)

「彼ら自身の(内面の)動きを教える前に第八周天円の運動を教えるのは大変愚かなことだ」と

いうこの文章は、子供に教えてやってほしいこととして先に述べられた、「いかなる力がわれわれを動かすのか (quels ressorts nous meuvent), われわれの中にこんなに多くのいろいろな衝動 (branles) があるのはなぜか」(ibid.) という言葉との、単なる言葉遊びではない。モンテーニュは「自惚れについて」の中で、同様の表現を用いて、同様の考えを、より詳しく展開している。その口調は、これから子供を生もうとしている貴族の婦人に献呈された「子供の教育について」とは異なる、遠慮のない口調である。

[A] Ces gens, qui se logent [C: perchent] a cheuau chons sus l'epicycle de Mercure, [C] qui voient si avant dans le ciel, [A] il me semble qu' [C supp.] ils m'arrachent les dents. Car en l'estude que ie fay, duquel le subiect c'est l'homme, trouuant vne si extreme varieté de iugemens, vn si profond labyrinthe de difficultez les vnes sur les autres, tant de diuersité & incertitude en l'escole mesme de la sapience : vous pouuez penser, puis que ces gens là n'ont peu se resoudre de la connoissance d'eux mesmes & de leur propre condition, qui est **continuelement presente a leurs yeux**, qui est **dans eux**, puis qu'ils ne sçauent comment **branle** ce qu'eux mesmes font **branler**, ny comment nous peindre & deschiffrer les ressorts qu'ils tiennent & manient eux mesmes : comment ie les croirois de la cause **du mouuement de la huitiesme sphere**, & [C supp.] du flux & reflux de la riuere du Nile. La curiosité de connoitre les choses a esté donnée aux hommes pour fleau, dit la **sacrosainte** [C : sainte] parole. (II, 17, M. pp.436-437; V. pp.634-635)

クセノポンの『メモラビリア』I, 1, 11-13における、人間学を疎かにして神界(=天界)の事柄を詮索する人間の言語道断を指摘するソクラテスの言葉に内容的に酷似するこの一節では、「子供の教育について」の一節よりもさらに強く、人間の内面の研究の優先性が強調されており、その対極にあるものとして外界の研究が提示されている。それを研究する者の典型が、「彗星の周天円に跨り、[C: 天空を遠く眺める] 人々」である。しかもここで彼らは、章の題名に挙げられた「自惚れ」のうち、自分を過大評価する「自惚れ」の例の筆頭であり、彼らの探究心は「神罰として人間に与えられた知識欲」なのである。哲学者たちによる人間研究の諸説に見られる不確実さが、モンテーニュに、自分自身の「動き方」も解明できていない彼らが説明する「第八周天円の運動やナイル河の干満の原因など、どうして信じられようか」と言わせる。つまり、「常に目の前にあり、自己の内にある」事柄さえ解明も解決もできないのに、外界の事柄を探求して説明する彼らの「自惚れ」は、困難だが人間にとって最も大切な研究に取り組む自己探求者・人間探求者モンテーニュには、「歯を抜く(真っ赤な嘘でペテンにかける)」者に思えるのである²。それは、テキストCでは«il me semble qu'»(のように思われる)が削除されて、より強い言い方になる。

本稿の冒頭で引用した「子供の教育について」の一節で、モンテーニュは、「何でも探求しよう

とする好奇心」を子供に植え付けるよう勧めていたが、「curiosité」は「honeste (正しい)」という形容詞で限定されていた。この形容詞は、あの箇所では、モンテーニュがアミヨのフランス語訳で愛読していたプルタルコスの『モラリア』の中の「詮索好きについて (*De la Curiosité*)」³ に述べられた、秘められた他人の不幸や欠点を知ること快感を覚える、邪な感情に支配された好奇心を除外するものであると、まずは考えるべきであろう。だが、モンテーニュが「curiosité」という語を使う時、この語は大部分の場合、上に引用した「自惚れについて」の一節におけるように、人間の過度の探究心というネガティブな意味をもつ。また、ここに聖書の言葉として援用された語句と同様の意味のラテン語句「Cognoscendi studium homini dedit Deus ejus torquendi gratia」が、モンテーニュの書斎の梁に記されていた⁴。したがって、ここにおける天文学者の「神罰として人間に与えられた知識欲」のような好奇心をも除外する意識が働いていたが故に、モンテーニュは「curiosité」を「honeste」で限定したのではないだろうか。

ここに記された「神罰として人間に与えられた知識欲」という言葉と、後にテキストCで(おそらく重複を避けるために)この一節から削除された語句「mouement de la huitiesme sphere」が明白に示すとおり、これらの箇所に記された思考は、モンテーニュが繰り返し発動し、形成する、イメージ表現と一体となった思考の一つである。「子供の教育について」のあの箇所にテキストCで加筆された、学問を有用な範囲に限定するソクラテスの教育法への言及と、次にわれわれが引用する、ディオゲネス・ラエルティオスの『ギリシア哲学者列伝』II, IIからの借用、およびそれに続く文章もまた、このことを示している。

[C] Anaximenes écrivant à Pythagoras : De quel sens puis-je m'amuser au **secret des estoiles**, ayant la mort ou la servitude **tousjours presente aux yeux** /.../. Chacun doit dire ainsin : Estant battu d'ambition, d'avarice, de temerité, de superstition, et ayant **au-dedans** tels autres ennemis de la vie, iray-je songer au **bransle** du monde? (I, 26, V. p.160)

「星々の秘密」, 「常に目の前にある死や隷属」, 「自己の内に人生の諸々の敵を抱えているのに、世界の運動など考えられようか」という語句は、上記の文章におけるものとまさに同一のイメージと思考に属するものである。

ソクラテスが初めて行ったとされる自然学に対する人間学の優先は、古代ローマにも、また、キリスト教においては信仰のための内省との対比という形で、受け継がれていた。たとえば、アウグスティヌスの次の文章が、ペトラルカをヴァントゥー山で内省に沈潜させたのである⁵。

人々は外に出かけてゆき、山の高い頂、海の巨大な波、河の広大な流れ、広漠たる海原、星辰の運行などに驚嘆します。しかし自分自身のことはおきざりにしています⁶。

モンテーニュはそれをこのように、自然界の、特に天体の運動の探求と、人間の内面の動きの研究との、同じく「運動」を対象とする際立って対照的な対立する一対の極とするのである。その双方が、古代ギリシア・ローマ以来、哲学がおびただしい数の説を生み出し解明に至っていない、解決困難な対象であることを、モンテーニュは知っている。しかし天体は、われわれが後に述べるように、人間の知を越える領域の対象である。これに対し、人間が自己の内に抱える問題の方は、すべての人間が個々人で考えねばならない、避けては通れぬ問題である。そのような必要性を有する自己の問題を蔑ろにして、天体運動の探求にかかわることを、モンテーニュは自惚れと見做すのである。しかも、結果としてもたらされてきたものは、せいぜいが「周天円、離心円、同心円」のような、解明困難な天体現象を説明するために「哲学[C:学問]が捏造し得た (elle ayt sceu inuenter)」⁷、数々の煩瑣な観念だった (II, 12, M. pp.292-293; V. p.537)。天文学者ではないモンテーニュにもその程度のことは分かっていた。このようにして、人間の内面の動きの研究の対極をなす天体運動の探求は、「神罰として人間に与えられた知識欲」として斥けられるのである。

このことは、古代ギリシア・ローマ以来の天文学の歴史だけでなく、16世紀における天文学の熱気を帯びた流行を反映している。われわれ現代人はコペルニクスの地動説(太陽中心説)をまず思い浮かべる。モンテーニュは『エッセー』の中で彼の説に一度しか、しかも、軽くあしらうようにしか言及していない⁷。とはいえ太陽は、天文学の対象という意味のみならず、それを越えた領域で付与された意味合いによっても、『エッセー』の中で特別な位置を占めている。

3. 最も分からない天体、太陽；人知の及ばぬ世界の法則。

『エッセー』における«soleil»の使用回数は多いとは言えない。『エッセー』の用語索引⁸によれば、単数形57回、複数形1回で、計58回である。そのうち20回が天体としての太陽であり、13回が人間の知の対象としての太陽である。これらの使用箇所の共通点は、人間の知の不確実性を述べる文脈に属することである。13回のうち12回が、人間の知の不確実さの告発に多くの部分を費やす「レーモン・スボン弁護」に見出されるのであるから、当然かもしれない。だが逆に言えば、そのような章に13分の12が含まれるということは意味のあることではないだろうか。これは、モンテーニュの天文学観を如実に物語っていると言えよう。実際、「父親が子供と似ていることについて」の中の、医学の不確実性を述べた次の文には、それが明白に表れている。

[A] Il n'y a pas grand dangier de nous mesconter a la hauteur du **soleil**, ou en la fraction de quelque **supputation astronomique** : mais icy, ou il va de tout nostre estre ce n'est pas sagesse de nous abandonner a la mercy de l'agitation de tant de ventz contraires. (II, 37, M. p.622; V. p.771)

これは、医学に対するモンテーニュの強い不信感が記述された長い件の中の一文である。そこに、医学の不確実性を述べるための前提として、天文学の不確実性が自明の理のごとく利用されているのであり、太陽高度の測定の誤りがその典型として挙げられているのである。この文章は、上記の12の使用箇所のうち、唯一「レーモン・スボン弁護」以外の章に見出され、唯一ヴィレーによる出典の指摘がなされていないものである。(もっとも、「*nous abandonner a la mercy de l'agitation de tant de ventz contraires*」は『博物誌』XXIX, v⁹からの借用と思われるのだが、何れにせよ,)この文章は、モンテーニュにとって太陽が人間の知の不確実性を表わす対象の代表格であることがおそらく彼自身の言葉によって表現されたものとして考慮に値する。

このことは、われわれが本稿第4節で取り上げる、「レーモン・スボン弁護」の中の太陽信仰に関する一節において、簡潔に言い表される。モンテーニュは太陽のことを、「われわれから最も遠く、それ故に最も分からない天体 (*la piece de cete machine, que nous descourons la plus esloignée de nous, & par ce moyen si peu connue*)」(II, 12, M. p.274; V. p.514)と呼ぶのである。

このような太陽観は、1580年以降、古代の著者たちからの借用が雄弁に物語ることになる。テキストBに属する次の一節は、プルタルコスの『モラリア』の「エピクロスに拠って楽しく生きることにはできないこと」からの借用である¹⁰。しかし、原典とは使い方がまったく異なる。「焼け死んでもよいから太陽を間近に見て、形、姿、大きさを理解したいと神々に願った」エウドクソスの事例を、プルタルコスは、エピクロス派を批判するテオンの台詞の中で、学問から生ずる快楽を擁護するためのものとして援用している。これに対し、モンテーニュは、人間の「病的な好奇心の空しい姿」を明白に示す例として挙げているのである。

[B] *La vaine image de cette maladiue curiosité, se voit plus expressement encores, en cet autre exemple qu'ils ont par honneur si souvant en la bouche. Eudoxus souhetoit & prioit les Dieux qu'il peut vne fois voir le soleil de pres, comprendre sa forme, sa grandeur, & sa beauté, à peine d'en estre brulé soudainement, comme fut Phaëton [C supp.]/.../ (II, 12, Pl.450-451; V. p.511)*

太陽の形状を見極めるために、生命を失ってでも太陽を間近に見たいと願う、古代の著名な幾何学者・天文学者エウドクソスの「病的な好奇心」は、テキストCで削除された(これも「エピクロスに拠って…」の同じ箇所からの借用である)パエトンへの言及から、人間の分を超えた好奇心を含意していると思われる。パエトンは、人間のお前には無理だし危険だと拒む父の太陽神に強引にねだって、日輪を操ろうとして操り損ない、大地を焼き尽くしそうになり、雷電に打たれて焼死したからである。この話は、モンテーニュが幼少時から親しんでいたオウィディウスの『変身物語』の巻2に詳しく語られているから、彼はその名だけでこの話を思い浮かべたはずであ

る。

「人間の目は自分の知っている形でしか事物を把握できない」ことを、名高い哲学者たちの太陽に関する滑稽な説によって示すテキストBの次の一節に、エピクロス派への言及が含まれており、そこに「死すべき人間の手で父の日輪を操りたいと願った」パエトンへの言及がテキストCで追加されていることは、これを明示するものではないだろうか。また、ここに同じくテキストCで加筆された、クセノポンの『メモラビリア』IV, vii, 6-7からの、太陽を燃える石だと定義したアナクサゴラスのことを評したソクラテスの言葉の借用は、さらに明白に、太陽が人知の及ばない対象の代表として扱われていることを示していないだろうか。

[B] **Les yeux humains** ne peuuent apercevoir les choses [C], [B] que par les formes de leur cognoissance. [C] Et ne nous souvient pas quel sault print **le miserable Phaeton** pour avoir voulu manier les renes des chevaux de son pere **d'une main mortelle**. Nostre esprit retombe en pareille profondeur, se dissipe et se froisse de mesme, par sa temerité. [B] Si vous demandez à la philosophie de quelle matiere est [C] le ciel et [B] **le Soleil**; que vous respondra elle, sinon de fer [C] ou avecq Anaxagoras, [B], & [C *supp.*] de pierre, ou autre [C : et telle] estoffe de son visage. [C : nostre usage?] /.../ Archimedes maistre de cette science qui s'attribue la presseance sur toutes les autres en verité & certitude : le Soleil, dict-il, est vn dieu de fer enflammé. Voila pas vne belle imagination, produicte de l' [C : la beauté et] ineuitable necessité des demonstrations geometriques. Non pourtant si ineuitable [C] et utile [B], que [C] Socrates n'ayt estimé qu'il suffisoit en sçavoir jusques à pouvoir arpenner la terre qu'on donnoit et recevoit, et que [B] Poliænus qui en auoit esté fameux & illustre docteur, ne les ayt prises à mespris, comme plaines de fauceté, & de vanité apparente, apres qu'il eust gousté les doux fruicts des iardins poltronesques d'Épicurus. [C] Socrates, en Xenophon, sur ce propos d'Anaxagoras, estimé par l'antiquité entendu au dessus tous autres és **choses celestes et divines**, dict qu'il se troubla du cerveau, comme font **tous hommes qui perscrutent immodereemant les cognoissances qui ne sont de leur appartenance**. Sur ce qu'il faisoit le Soleil une pierre ardente, il ne s'advisoit pas qu'une pierre ne luit point au feu, et, qui pis est, qu'elle s'y consomme ; en ce qu'il faisoit un du Soleil et du feu, que le feu ne noircit pas ceux qu'il regarde; que nous regardons fixement le feu; que le feu tue les plantes et les herbes. C'est, à l'advis de Socrates, et au mien aussi, **le plus sagement jugé du ciel que n'en juger point**. (Pl. 468; V. p.535)

「天界の神々の事柄」を定義することを、「身の程知らずの知識をほじくり過ぎる」こととし、「私自身の考えでもある」と言って導き出された「天についての最も賢明な判断は何も判断しないことだ」という言葉で締めくくられたこの一節において、太陽は、人間の領域とは画然と区別され

た神々の領域に属するものを代表している。それを知ろうとすることは、「人間の分を超えた節度のない詮索」であり、「常軌を逸する」ことになる行為なのである。

上記の一節で人間の領域と神々の領域との峻別を言い表した箇所はテキストCだが、この峻別は、テキストAの次の一節において、キリスト教的に表現されている。モンテーニュは、人間の理性は神の事柄について考える時は特に見当違いが甚だしいことを述べる文脈において、愚かにも神の能力を限定する人間に対し、世界の法則について人間が云々することを次のように斥ける。

[A] Atache toy a ce a quoy tu es subiect, mais non pas a [A'supp.] luy [=Dieu]. Il n'est pas ton confrere, ou concitoyen, ou compaignon. S'il s'est aucunement communiqué a toy, ce n'est pas pour se raualer a ta petitesse, ny pour te donner le contrerolle de son pouuoir. Le corps humain ne peut voler aus nues : c'est pour toy. **Le soleil bransle sans seiour sa course ordinaire.** Les bornes des mers & de la terre ne se peuuent confondre. L'eau est instable & sans fermeté : vn mur est [B], sans froissure, [A] impenetrable a vn corps *humain* [B : solide] : l'homme ne peut conseruer sa vie dans les flammes : il ne peut estre & au ciel & en la terre & en mile lieux ensemble corporelement. C'est pour toy qu'il a faict ces regles : c'est toy qu'elles attachent. Il a tesmoigné aux Chrestiens qu'il les a toutes franchies quand il luy a pleu. (II, 12, M. pp.284-285; V. p.524)

世界の法則は、人間が定めてそれによって神の力を限定するものではなく、神が定めるものであり、人間はそれに従うのみであることを述べたこの箇所の、「*Le corps humain*」以下は、聖書に物語られた奇蹟への暗示である¹¹。太陽に関して言えば、たとえば『ヨシユア記』10:12-14の太陽の運行停止を指すと思われる。だが、それらはすべて神が行ったことであり、人間も太陽も海も陸も、神が創造し、そのありようを定めたのであり、その法則を超越するのは神であって、人間ではない、というのである。したがって、太陽の軌道をはじめ世界の法則の人間による規定は、神が定めた法則の歪曲に他ならない。それは人間の知の探求の対象ではないのである。

無論、モンテーニュのように固定観念や既成概念に縛られない柔軟な思考の持ち主は、いつになるかは分からなくとも将来、太陽の形状や天体運動の法則が、誰の目にも明白な証拠によって明らかになる日が来るかもしれない、という可能性を排除しなかつたらう。実際、テキストBの、「自然がいつかその胸を開いて、自然の偉大な運動の秘められた手段と運行をはっきりとわれわれに見せて、われわれの目をそれに慣らしてくれるに違いない。おお神よ、その時われわれはわれわれの哀れな学問に、どれほどの錯誤、どれほどの虚妄を見出すことだろう」(PI. 469; V. p.536)という言葉は、「レーモン・スボン弁護」における学問批判の文脈を損なうことなく、それを証言していないだろうか。だが彼は、『エッセ』の読者が、まずは同時代のフランスの人々

であることを常に念頭に置いていた。将来、世界の人々が自著を読むことを期待し、先見の明を誇示することよりも、今、彼の目の前にいる、宗教を口実とした内乱と、信仰を揺るがす事柄までも探求する学問とによる、危機の時代を生きねばならぬ同時代の読者の方が大切だった。だからテキストBでも、世界を介して人間が神の見えざる業を見るのは信仰によるという文脈を、プルタルコス『魂の平静について』の中の、太陽をはじめとする被造物を「死すべき人間の手ではなく」神が創った神聖な神殿の像とするプラトンからの援用¹²の借用によって補強するのである。

[B] Car ce monde est un temple tressainct, dedans lequel l'homme est introduit pour y contempler des statues, non ouvrées de mortelle main, mais celles que la divine pensée a fait sensibles : le Soleil, les estoilles, les eaux et la terre, pour nous représenter les intelligibles. [A] Les choses inuisibles de Dieu, dit saint Paul, aparoiissent par la creation du monde, considerant sa sapience eternelle & sa diuinité par ses œuures. (M. p.164; V. p.447)

4. 太陽、神の表象.

『エッセー』において、人間の知の領域を超える対象、常軌を逸した詮索の対象を表わす太陽という語には、顕著な含意がもう一つある。キリスト教以外の信仰における太陽神とキリスト教の神の比喩としての太陽である。なかでも、テキストA (II, 12, M. pp.272-274; V. pp.513-514)における、太陽神信仰への言及を含む次の一節には、人間の知の領域を超える天体という要素と結合した、モンテーニュの信仰観の重要な部分が見出される。

ここでモンテーニュは、「最も真実らしく妥当に思われる (me semble auoir eu plus de vray-semblance & plus d'excuse)」信仰について述べている。その中で彼が繰り返し強調する点は、「神を、われわれの理解することのできない力 (vne puissance incomprehensible) と認める」ということである。この点はまず、モンテーニュが信仰に関して考えを述べる時アウグスティヌスと並んで頻繁に援用する聖パウロを引き合いに出して、「聖パウロも、アテナイで行われていたあらゆる信仰のうち、目に見えない、分からない神 (vne diuinité cachée & inconnue) に捧げた信仰を、最も許すべきものと考えた」と補強される。次いで、下記の引用では省略するが、16世紀フランスの国民的詩人ロンサールの詩句を引用した後、再び強調される。神聖に形態を与えることは「世界全体が盲目であることからやむを得なかった」のだが、そのような信仰の内、太陽神崇拝に従ったことだろうと言うのである。

[A] de celles ausquelles on a donné *quelque* [C *supp.*] corps, comme la necessité l'a requis, pour la conception du peuple, [C *supp.*] **parmy cete cecite vniuerselle**, ie me fusse ce me semble, plus

volontiers attaché a ceux qui adoroient le soleil,

/.../

D'autant qu'outre cete sienne grandeur & beaute, c'est la piece de cete machine, que nous descourons la plus esloignée de nous, & par ce moyen si peu connue, qu'ils estoient excusables [C : pardonnables] d'en entrer en admiration & espouuamment [C : reverence]. [C]/.../ [A] Les choses les plus ignorées sont plus propres a être deifiées. (II, 12, M. pp.273-274; V. p.514)

モンテーニュが太陽信仰を例外的に弁護し得ると見做す理由は、太陽が偉大で美しいこと以上に、「われわれから最も遠く、それ故に最も分からない」天体だからなのである。さらに、テキストAでは間を置かずすぐさま、「最も知られていないものが、最も神とされるに適している」と続けている。この一節における、「分からなさ」のこのようにくどいほどの繰り返しは、モンテーニュの信仰観における、神を人間にとって知的理解不可能なものとする考えの重要性を雄弁に物語っている。そうした考えを具現するものが太陽なのである。

ところで、ここには、『エッセー』における詩句の引用の中でも最も長い部類に属する、ロンサールの『フランス国民への訓戒詩』からの引用において、「すべてのものに生命を与え、われわれを維持し保つ (Qui donnent vie a tous, nous maintiennent & gardent)」、 「宇宙を明らかな力で満たし一瞥で雲を散らす (Qui remplit l'univers de ses vertus connus: /Qui d'un traict de ses yeux nous dissipe les nues)」等、太陽＝神の偉大な恩恵が表わされている点も看過できない。太陽とその光は、古代ギリシア・ローマの著作においても、キリスト教においても、ルネサンス時代に復興しフランスにも流布した新プラトン主義においても、神やその恩恵の喩えとして用いられてきたからである。何れも実例は枚挙に遑がない。本稿第5節でクセノポンとプルタルコスの例を引くことになるので、ここでは、この喩えを伝承したキリスト教神学と新プラトン主義の例を挙げよう。たとえばアウグスティヌスは『神の国』の中で、「上からの照明」について、「プロティノスがプラトンの見解を説明する時しばしば繰り返し強調する」、「神は太陽であり、靈魂は月である」という喩えが、ヨハネが「神からつかわされて」「光についてあかしをするために」きたという「ヨハネによる福音書」の言葉と一致すると見做す¹³。また、神の慈悲について語る時、「マタイによる福音書」5の45の言葉をたびたび引用する。

しかし神はその怒りのうちに憐れむことを忘れたのではなく、善人の上にも悪人の上にもその太陽を昇らせ、正しい者の上にも不正な者の上にも雨を降らせ、このようにしてその憐れみを怒りのうちに閉じ込めることをしないのである¹⁴。

フィチーノは、プラトンの『饗宴』の注解において、次のように述べる。

ディオニューシオスが神を太陽と比較して、太陽が物体を照らしあたためるように、神は魂を清らかな真理の光で照らし、愛の炎であたためる、と語ったのは正しかったのである。この比喩に関してはプラトンの『国家』第6巻を参考にして次のように語ることもできる。物体を見えるものにし、目を見るものにするのは太陽である。/…/同様にして、/…/被造物は神という太陽の、目には見えない不断の光が自分のもとにたえず訪れ、自分の持つ力を活気づけ、生気づけ、刺激し、元気づけ、強めてくれるのを待つのである/…/¹⁵

この伝統的比喩は、カスティリオーネの『宮廷人』のような作品によっても伝承された。

神の善意は、あたかも太陽の光に似て、あらゆる被造物の上に放射されています。¹⁶

5. 太陽の直視と失明の比喩

以上のように太陽に付与された含意は、すべてモンテーニュが古代ギリシア・ローマ以来の著作から汲み取ったものである。それらは、16世紀の教養ある人々の間で周知のものだった。だからこそ、それらは、第1巻第32章「天命を判断するには慎ましくすべきこと」における「見上げる目」の戒めにおいて効果を発揮する。

この章でモンテーニュは、出来事について神意の恣意的な解釈を行うことに対し、「慎ましくすべきこと」を述べるのだが、対象が「分からないもの」であることは、冒頭から明確に示されている：「欺瞞の真の領域と題材は、知られていない事柄である (*Le vray champ & subject de l'imposture sont les choses inconnües*)」(I, 32, *M.* p.329; *V.* p.215)。テキストCでこの数行後に加筆されたプラトンの説の援用でも、「聞く者の無知が、秘められた題材を好き勝手に操作できる立派な広い競技場を提供するからだ (*par ce que l'ignorance des auditeurs preste une belle et large carrière et toute liberté au maniement d'une matiere cachée*)」(*V. ibid.*)と、題材が人間に「隠されたもの」であることが示されている。さらに冒頭文に「*imposture*」とあるように、「人々が最も知らないこと (*ce qu'on sçait le moins*) ほど固く信じられやすい」のを利用して人々を信じ込ませることは、「ペテン」なのである。モンテーニュは、「彗星の周天円に跨り [C: 天空を遠く眺める] 人々には、真っ赤な嘘でペテンにかけられるような思いがする」と言っていた。また、医学について、「この場合はわれわれの全存在に関わることだから、こんなにも思い思いの風の吹き回しに身を任せるのは賢明ではない」と言っていた。実際、この後で列挙される、人々の無知に付け込む巧妙なペテン師たちは、「錬金術師、予言者、占星術師、手相占い師、医者、《その種のすべての輩 (*id genus omne*)》」である。最後のラテン語引用句は、出典であるホラティウスの『風刺詩』では (*id*が*hoc*だが)、気前のよい男をカモにしていた贗薬売りや法螺吹き食客の類を指す¹⁷。

モンテーニュは、出来事について神意の解釈をする人々を、これらペテン師の仲間に加える。なぜなら、彼らは「神の御業の理解し得ない動機を神意の秘密の中に見る (*voir dans les secretz de la volonté diuine, les motifs incomprehensibles de ses operations [C : œuvres]*) と称し」、矛盾する恣意的な解釈を繰り返しているからである (*M. p.330; V. ibid.*)。モンテーニュはさらに、「キリスト教徒たるものは、すべての事柄が神に由来すると信じ、神の神聖な計り知れない知恵 (*sa diuine & inscrutable sapience*) に感謝して受け取り、それらがどのような様相と味わいでおくられようとも、良い意味に受け取れば十分である」、と続ける (*M. ibid.; V. p.216*)。

このように、神意の計り知れなさは、冒頭からここまでのわずかな分量のテキストにおいて、何度も繰り返し強調されている。これこそは人間に最も分からないものなのである。したがって、これについて人間が判断しようとすることは、「彗星の周天円に跨り [*C : 天空を遠く眺める*] 人々」以上の「自惚れ」であり、度を越した詮索であろう。

だからモンテーニュは、キリスト教徒はすべてのことを「良い意味に受け取れば十分である」と言うものの、信仰を強化するために宗教戦争における勝利を一々「神の支持」と言い立てていると、負けた時「父なる神の笞と懲らしめ」と弁解しても、「一袋の麦で二袋分の挽き賃を取り、同じ口で熱いものも冷たいものも吹くという印象を与えることになる」と警告する。何れも、一方はラブレールが、他方はエラスムスが、著作の中で用いた、ずるい、いい加減なやり方を表わす表現である。つまり、ペテン師同様の印象を人々に与えてしまうことになる、と言うのである。さらに、ティツィアーノの『レパントの海戦のアレゴリー』が当時の人々の熱狂ぶりを今日に伝える、この海戦の勝利を例に取り、民衆に「事実をありのままに伝えようとしても、「結局目減りなしには済まない」ことを示す¹⁸。のみならず、アリウスと彼の擁護者レオが同じようにトイレで突然死したことを「神罰」と見做す人々を引き合いに出して、同じ場所で殺されたヘリオガバルスの死も同じ「神罰」に加えられようが、ならば、やはり同じ場所で殺されたイレナエウスはどうなのか、と畳み掛けていく。キリスト教の異端説の提唱者で聖ヒラリウスを迫害したアリウスとその援護者対立教皇レオの死は、16世紀にロングセラーを博した『アキタニア年代記』の中で、ブーシェが「神罰 (*punition diuine*)」、「奇蹟 (*miracle*)」と呼んでいた¹⁹。ヘリオバガルスと殉教者イレナエウスの死は、当時の教養ある読者に人気のあったラウイシウス・テクストールの百科事典的作品の中で、「トイレで死んだあるいは殺された者」という項目に入っていた。ただし、ヘリオガバルスの死は「神罰」とされているが、イレナエウスの方はそうされていない²⁰。このようにしてモンテーニュは、時代のトピックに次々と訴えかけて、人間の理屈で神意を解釈すれば破綻を来たさざるを得なくなることを示すのである。

このような章の締め括りとして、太陽を見上げることを戒める比喩が、プルタルコス『詮索好きについて』から借用される。

[A] *Somme [B supp.]* il se faut contenter de la lumiere qu'il plait au Soleil nous communiquer par ses rayons : & qui esleuera ses yeux pour en prendre vne plus grande dans son corps mesme, qu'il ne trouue pas estrange si pour la peine de son outrecuidance il y perd la veüe. (I, 32, M. p.333; V. pp.216-217)

本稿ですでに述べたように、『詮索好きについて』は、他人の秘められた不幸や悪徳の詮索を扱っている。その中でこの喩えは、権力者の秘密を詮索することの危険性を教えるために用いられている²¹。それを、モンテーニュがこのような文脈に適用したのである。

この喩えにおけるプルタルコスとモンテーニュの違いは以下の2点である。

①太陽の光という要素に、「見上げる」という、太陽と人間の位置関係の要素が追加されている。

【プルタルコス】 *ceux qui /.../ veulent à plein fond regarder le cercle mesme de son corps, en osant se promettre qu'ils penetreront sa clarté, & entreront des yeux à force au beau milieu*

【モンテーニュ】 *qui esleuera ses yeux pour en prendre vne plus grande dans son corps mesme*

②失明に、「傲慢の罰として」という意味付けがなされている。

【プルタルコス】(なし) 【モンテーニュ】 *pour la peine de son outrecuidance*

プルタルコスが詮索好きを論ずるために用いた喩えが、ここでは、神を見上げて傲慢にも神意を見極めようとすれば、罰を受けるという戒めになっている。キリスト教化されつつも、この喩えの出典であるクセノポンの『メモラビリア』IV, iii, 14における意味に戻っている。

そうだ、私の言うことが本当であることは、君が神々の姿を目のあたりに見るまで待とうとせず、神々のなさる業を見ることで満足して、神々を崇めかつうやまうならば、君にも直ぐわかるであろう。 /.../ また考えたまえ。太陽は万人にその姿を現わしているようではあるが、しかも人間がこれを凝視することをおゆるしにならず、もし誰か厚かましくこれを瞳めようと試みる者があれば、その視力を奪ってしまうのである。²²

このソクラテスの言葉が、見事にこの章の文脈に合っているのは、おそらく偶然の一致ではない。また、モンテーニュがプルタルコスの『詮索好きについて』から太陽の直視と失明の喩えを引用したのも、『メモラビリア』の仏訳がまだなかったということよりも、(具体的な意味内容は違うが)「詮索好き」という主題がそうさせたのだろう。『エッセー』における引用・借用は、出典とは異なる文脈に移されながら、このように巧みに言外の意味を含んでいるのであるから。

太陽が、人間にとって分からない天体の代表格であること、および信仰において太陽光線が神の恩恵の比喩として用いられ、太陽神やキリスト教の神とも結びつけられていること、これらの言葉の背景をモンテーニュは有効に利用している。後にこの章に加筆されたテキストBの、運も

不運も神意に帰し、判断も理性も神意に服する、新大陸の国民の太陽神信仰もまた然りである。その結果、太陽を見上げる目の失明の比喩は、至る所に目を向け判断の試みの対象とする『エッセー』の中で唯一、見ることを戒める、特異な喩えとなっているのである。その根拠である神意の計り知れなさもまた、テキストCで、アウグスティヌスの『神の国』I, viiiにおける(そこでも太陽を神の慈悲の表象とする「マタイによる福音書」の言葉が引かれている)、神の慈悲が悪しき者に及ぶのも、現世の幸福が必ずしも善き者に与えられないのも神の摂理であり、人間が善悪を敬虔さ以外の動機で求めたり避けたりすることのないようにするためである、という証明の援用がこの喩えの直前に挿入されることで、いっそう強調されるのである。

天空と太陽を見上げることがこのような意味を持つため、モンテーニュが判断を試みるために至る所に向ける視線の対象は、それ以外のもの、すなわち地上に属するものとなる。本稿(3)で考察したように、地上歩行の比喩は、第3巻執筆時期以降に限られたものではなく、初版のテキストにすでに存在し、判断の試みに関する叙述に特徴的に用いられていた。本稿で考察した、人間と神の領域を峻別し、判断の対象に例外を設ける意識が、その理由であると言えよう。

自己の内面へ目を向けることと自然学との対比は、アウグスティヌスやペトラルカも行っていたことについてはすでに触れた。彼らの精神を鼓舞した「キリスト教的ソクラテス主義は、ギリシア的ソクラテス主義が表明していた言い方を転倒」し、「『汝は神ではなくして、死ぬべき被造物であることを知るために、汝自身を知れ』」から、「『まさに汝は死ぬべきものであるが、神と類似してつくられていることを知るために、汝自身を知れ』」に変えたものだったのであるならば²³、モンテーニュは再びそれを「転倒」して、「ギリシア的ソクラテス主義」を実践したと言えよう。しかも、ソクラテスの徳の賞讃が顕著な第3巻執筆時期になってからではなく、初版執筆時期にすでに実践していたのである。モンテーニュはそのような意味で、地上の人間たちと彼らの行為、習慣、法律、学説、宗教に至るまで、あらゆる事柄を人間学的に見る対象とし、自分を映して見るための鏡とし続けるのである。

註

1 『エッセー』からの引用は、初版のテキスト([A])はMichel Eyquem de MONTAIGNE, *Essais, reproduction photographique de l'édition originale de 1580, publiée par D. MARTIN, 2 vol.*, Genève-Paris, Slatkine-Champion, 1976 (M.と略記)によるが、印刷の都合でs, en等を表わす特殊文字や記号は現代語風に改めた(以下他のテキストも同様)。各引用末尾の括弧内の数字は巻、章、頁番号を示す。頁番号の誤植が上記の版で修正併記されている場合は修正頁番号を記す。その後「/」で区切り*Les Essais de Michel de Montaigne, éd. P. VILLEY, rééd. V.-L. SAULNIER, 2 vol.*, PUF, 1978 (V.と略記)の該当頁番号を併記する。[A]は初版、[A']は1582年版(M.の指示に従う)、[B]は1588年版、[C]は1588年版への加筆等を示す。テキストB・CはV.に準拠するが、語句の置換・

削除がV.に反映されていない箇所は、Michel de MONTAIGNE, *Essais, reproduction en fac-similé de l'Exemplaire de Bordeaux 1588*, Genève-Paris, Slatkine, 1987に拠り、その図版番号(Pl.で示す)を併記する。置換・削除された語句はイタリック体で記し、その直後に置換は[C: 変更後の語句]、削除は[C *supp.*]のように示す。太字による強調は引用者。和訳は岩波文庫の原二郎氏の訳を参照したが、変更した箇所が多くある。

- 2 Cf. Algirdas Julien GREIMAS, Teresa Mary KEANE, *Dictionnaire du moyen français*, Larousse, 1992のdentの項目13: «Mensonge. *Mentir comme un arracheur de dents. - Mentir par ses dents, démentir qqch sans y croire*».
- 3 PLUTARQUE, *De la Curiosité*, in *Les Œuvres morales & meslees de Plutarque, Translatees du Grec en François par Messire Jacques Amyot, à present Euesque d'Auxerre, Conseiller du Roy en son priué Conseil, & grand Aumosnier de France. A Paris, De l'Imprimerie de Michel de Vascosan. M.D.LXXII, f^{os}63 v^o - 68 r^o*. 短い作品であるにも関わらず、この作品から『エッセー』への借用は、Isabelle KONSTANTINOVIC, *Montaigne et Plutarque*, Genève, Droz, 1989, p.26によれば、テキストAで3回、テキストBで5回、計8回である。
- 4 V. p. LXVIII.
- 5 ペトラルカ『親交書簡集』第4巻1 (佐藤三夫訳編『ルネサンスの人間論』, 有信堂, 1984, p.21).
- 6 アウグスティヌス『告白』X, VIII, 15 (山田晶訳, 「世界の名著」, 中央公論社, 1981, p.341).
- 7 «Et de nostre temps Copernicus a si bien fondé cete doctrine, qu'il s'en sert tres-regléement a toutes les consequences *Astrologiennes* [C : Astronomiques]. Que prendrons nous de la, sinon qu'il n'y a guiere d'assurance ny en l'vn ny en l'autre. Car [C : ne nous doit chaloir le quel ce soit des deux? Et] qui sçait qu'une tierce opinion d'icy a mille ans ne renuerse les deux precedentes» (II, 12, M. p.347 ; V. p.570).
- 8 Roy E. LEAKE, *Concordance des Essais de Montaigne*, Genève, Droz, 1981.
- 9 «Mutatur ars cottidie totiens interpolis, et ingeniorum Graeciae flatu inPELLIMUR, palamque est, ut quisque inter istos loquendo polleat, imperatorem ilico uitae nostrae necisque fieri» (Pline l'Ancien, *Histoire naturelle*, Les Belles Lettres, 1962, XXIX, v, p.23).
- 10 *Que lon ne sçauroit viure ioyeusement selon la doctrine d'Epcurus*, in PLUTARQUE, *op.cit.*, f^{os} 282 v^o - 283 r^o : «Eudoxus souhaittoit & faisoit prieres, qu'il peust veoir de pres le Soleil, comprendre sa forme, sa grandeur, & sa beauté, & puis en estre bruslé, comme fut Phaëthon».
- 11 V. p.524, note 4; MONTAIGNE, *Œuvres complètes*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1962, p.1562.
- 12 *De la tranquillité de l'ame & repos de l'esprit*, in PLUTARQUE, *op.cit.*, f^o 76 r^o : «ce monde est vn temple tres-sainct, & tres-deuot, dedans lequel l'homme est introduit à sa natiuité, pour y contempler des statues non ouurees & taillees de mains d'hommes, & qui n'ont aucun mouuement, mais celles que la diuine pensee a faittes sensibles, pour nous représenter les intelligibles, comme dit Platon, aians en elles les principes empraints de vie & de mouuement, c'est à sçauoir, le Soleil, la Lune, les estoilles, & les riuieres, iettans tousiours eau fresche dehors, & la terre qui enuoye & fournit sans cesse aliments aux animaux & aux plantes».
- 13 アウグスティヌス『神の国』X, II (服部英次郎・藤本雄三訳, 岩波文庫, 1982, (二), pp.301-302).

- 14 同書, XXI, xxiv (岩波文庫, 1991, (五), p.334).
- 15 『恋の形而上学 フィレンツェの人マルシーリオ・フィツィーノによるプラトーン『饗宴』注解』, 左近司祥子訳, 国文社, 1985, pp.37-38
- 16 カステイリオオーネ『宮廷人』, 清水純一・岩倉具忠・天野恵訳注, 東海大学出版会, 1987, pp.723-725.
- 17 «Ambubaiarum collegia, pharmacopolae, / mendici, mimae, balatrones, hoc genus omne» (HORACE, *Satires*, Les Belles Lettres, 1995, I, II, 1-2, p.40).
- 18 Cf. 拙論『「エッセー」第1巻第32章と第34章における「運命」と神意の解釈の問題』(『広島大学文学部紀要』第60巻, 広島大学文学部, 2000, pp.257-282), p.273.
- 19 Ian BOUCHET, *Annales d'Aquitaine. Faicts & gestes en sommaire des Roys de France, & d'Angletere, & pais de Naples & de Milan : reueües & corrigées par l'Autheur mesmes : iusques en l'an mil cinq cens cinquante & sept. A Poitiers, par Enguilbert de Marnef. M.D.LVII, chap.VII, f^{os} 13 v^o - 14 r^o : «ce que Dieu ne voulut permettre : car ainsi qu'on menoit Arius a l'Eglise, pour le mettre on siege episcopal, vng mal de ventre le surprint, & s'en alla a son secret, ou il rendit toute la tripaille par le bas, & mourut miserablement par punition diuine»; chap. X : «Du miracle faict a Rome par les prieres de saint Hilaire, en la congregation des Euesques, du temps d'ung Antipape Leo, qui n'est on catalogue des Papes», f^o 19 r^o - v^o : «Leo n'entendit l'interrogatoire de saint Hilaire, parquoy ne luy fist response, & alla a son secret pour lascher son ventre : & voyant saint Hilaire, que par la craincte de Leo, ou aultrement, on differoit de luy donner lieu es sieges des aultres Euesques, dist ces parolles : Domini est terra : c'est a dire, la terre est a Dieu, & demourray sur la terre a Dieu appartenant, tant qu'il luy plaira. Lors miraculeusement la terre s'esleua en forme d'ung beau siege, plus esleué que tous les aultres : dont tous les assistans furent esbahis, & ne disoyent mot, comme gens estans en extasie, mesmement Valens & Vrsatius, ennemis principaulx de saint Hilaire. Et comme ilz attendoyent le retour de Leo leur president, esperans qu'il feist quelque mauuais tour a S. hilaire, on leur vint dire que Leo estoit mort tout subitement: au moyen de quoy tous effraiez sortirent dudict conclaue, pour en scauoir la verité, & trouerent que le ventre de Leo luy estoit party sur les latrines, & y auoyt rendu l'esprit miserablement, comme auoyt faict son autheur Arius».*
- 20 «IN LATRINIS MORTVI AVT OCCISI. /.../ Lampridius ait Heliogabalum naturæ portentum, fato à tali monstro pœnas reposcente, in latrina occisum fuisse, dum uentrem exoneraret. /.../ Ireneum & Abundium martyres Valerianus in cloacam detrudi, & ibidem emori fecit, quòd sanctæ Concordiæ corpus inde extraxissent.» [便所で死んだ, あるいは殺されたものたち /.../ランプリディウスは, 自然の怪異であるヘリオガバルスが, これほどの怪物を罰する神意によって, 排便している間に便所で殺害されたと言っている. /.../ウァレリアヌスがイレナエウスとアブンディウスを下水道に突き落とし, そこで死なせて殉教者にしたので, 聖コンコルディアたちが死体をそこから引き出した.] (Ioannis Ravisii Textoris Nivernensis Officina, nunc demum post tot editiones diligenter emendata, aucta & in longè commodiorem ordinem redacta per Conradum Lycosthenem Rubeaquensem, Basileæ apud Nicolaum Bryling. Anno M. D. LII, Titulus III. De Homine, 539.)
- 21 PLUTARQUE, *De la Curiosité*, in *op.cit.*, f^o 64 v^o.

22 クセノフォン『ソークラテースの思い出』, 佐々木理訳, 岩波文庫, 1974, pp.200-201.

23 マルティネッリ『ペトラルカとヴァントゥー山』, pp.198-201 (佐藤三夫, 上掲書, p.36).

Montaigne, regard vers le haut, regard vers le bas (4)

— contraste entre la généralité du regard et l'exception du regard vers le haut dans les *Essais* —

Mariko OKUMURA

Dans toute œuvre, il y a des éléments généraux et des éléments exceptionnels qui constituent chacun ses caractéristiques. Ce présent article traite du contraste entre la généralité des expressions concrètes ou figurées de l'acte de voir et un certain regard vers le haut qui est fortement récusé dans les *Essais* de Montaigne.

Comme dans ses conseils donnés sur l'éducation des enfants dont le premier but est de former leur jugement, l'acte de voir joue un grand rôle quand il essaie d'appliquer son propre jugement. Il fait des choses, des hommes et du monde qu'il «voit» dans sa vie quotidienne et dans sa lecture, ses matières et «le miroir» où il se regarde pour se connaître et peindre son autoportrait. De plus, il fait «voir» ces matières aux lecteurs pour qu'ils en jugent eux-mêmes, parce qu'il n'a pas l'intention de leur imposer sa manière de «voir» mais plutôt de leur montrer «la mesure de sa vue».

Contrairement à cet aspect de la vue qu'il privilégie, il refuse le regard vers le ciel et surtout vers le Soleil. Il tient pour présomptueux les astronomes, investigateurs des «mouvements» des étoiles, puisqu'ils négligent les problèmes humains qui sont «continuellement présents à leurs yeux» et leurs propres «mouvements» qui sont «dans eux». D'ailleurs, c'est Dieu qui a ordonné les lois de l'univers; l'homme ne sait pas résoudre ces secrets. C'est pour la même raison que Montaigne considère comme imposteurs les gens qui prétendent interpréter la volonté divine, et qu'il les avertit métaphoriquement qu'en élevant les yeux vers le Soleil, ils perdront la vue en punition de leur orgueil.

Ce contraste se trouve dès la première édition des *Essais*. Montaigne sépare nettement le domaine des choses humaines de celui de Dieu : il y pratique déjà le principe socratique grec avant de manifester ultérieurement une immense admiration pour la vertu de Socrate.